平成2６年度第３回大阪府市文化振興会議　議事要旨

１　日　時　　平成26年９月１６日（火）午後1時～３時

２　場　所　　I-siteなんば　カンファレンスルーム３

３　出席委員　橋爪会長、中川副会長、池末委員、太下委員、佐藤委員（ＡＣ部会長）、西村委員、松尾委員、山川委員、山下委員

４　議　題

（１）アーツカウンシル部会の取組みについて

（２）その他

５　議事概要

（１）アーツカウンシル部会の取組みについて

　○佐藤部会長から、資料１をもとに、アーツカウンシルから提言のあった新規事業の進捗状況について大阪府市文化振興会議に報告。主な内容は次のとおり。

　・大阪は、アートフェスティバルに足繁く通う人と、まったく行かない人と二極化の

状態。また同じ音楽ファンでも、クラシックファンはジャズを聴きに行かない、ま

たはその逆といったような、ジャンル間の分断が起きている。

　・フェスティバルを実施するに当たっては、有料か無料か、鑑賞型ではなく参加型とするか、前半のしかけと事後の波及効果などをよく検討する必要がある。

　・大阪で来年度に実施予定のフェスティバルについては1フェスティバルを通じてタコツボ化を解消して様々なつながりを作る　2様々な才能が自由に動ける環境をつくる　3その成果を府民市民と共有する　という３つの目標の下実施したい。

・また、今の大阪には物を作るアーティストはいるが、それを組織してお客さんと繋ぐプロデューサーが不足しているため、若手プロデューサー・ディレクターのアイデアを取り入れ、企画・運営を託してみようと検討しているところ。

・フェスティバルの実施については３段階のメニューを考えている。まず、ショーケース形式でシンプルに、たくさんのものを見られるチャンスを作りたい。次に、作品の知識を深めるワークショップ等の実施。最後に本番公演の実施。

　・フェスティバルの実施に合わせた、リアルタイムの情報発信や大阪で実施されるフェスティバルを網羅したガイドブックも作成できればと考えている。

　・小さく構えて大きく育てるより、最初から具体的に大きく構えないと、フェスティバルとしては難しいという意見もあるので、委員の皆様のご議論をお願いしたい。

○委員から主なコメントは以下の通り。（→は佐藤部会長）

・フェスティバルには動員目標が必要では。東京に一極集中していたものを大阪に引き戻すためには、集客力のある、ある程度大規模なものが想定されるのでは。

→具体的な人数設定はまだ考えていない。事業規模より、プロデューサーがいないと

いった大阪の課題をまず一点打破したい。

・プロデューサーを作るやり方はいくつもあるが、例えば、本気で大阪について大き

なことをやろうと考えている人であれば、大阪出身等にこだわらず、全世界から招

聘したり、参加を募ってはどうか。また、行政からのお金がいつストップするか限

らないので、なるべく早く民間ベースのフェスに移行すべき。

・億単位の予算で、数十万人の来場者数のフェスティバルが日本各地で開催されてい

るなか、アーツカウンシルとして現場を回ったものとしては、大阪の土壌はかなり痩せてきているという感想。大きいフェスより、土壌を耕すようなフェスが必要では。期間限定で来場者数が何人かを考えるより、フェスによって汲み上げた大阪のリアルな課題を地域に還元することで、波及効果を生むことができないか。

・大阪の難しいところは、カネ・ヒト・ハコがない中でどうやっていくか。プロデュ

ーサー・ディレクター・実行部隊をどこに担ってもらうか。力のあるプロデューサ

ーを大阪に引っ張ってきて解決してもらうのも一案だがそういう夢のような方が

いるのか。大阪にある既存の文化事業を集め、育ててフェスティバルの仕立てると

うやり方もあるのではないか。

・現場に基づいた意見はもちろん貴重だと思うが、どこかで突き抜ける必要があるのでは。大阪は東京に次いで２番目の都市。都市間競争に勝つ必要がある。大阪でフェスをやり、そこにめがけて観客が来る。その人達に見てもらうためにパフォーマーが集い、さらにお客が来るといった循環を作るのが、元々の意義なのでは。

・先ほどの佐藤部会長の報告から、まず情報発信について。大阪にもクオリティの高い文化事業はあるが、そのホームページには普通たどり着かない。それを解消するためには、ポータルの仕組みが必要。沖縄でも文化イベントや催しが盛んに行われているが、県民がお互い行きあってるだけで、観光客には伝わっていない。そのため、行政の助成金を活用し、最終的にはポータルを作る取組を行っているところ。

　フェスティバルについては、他の意見にもあるように、小さく初めて大きくするのはかなり困難。また、ミックスジャンルについては、少なくとも東京ではニーズがない状態。演劇のフェスティバルを開催しても、そんな爆発的に観客が集まらない中で、ミックスジャンルのフェスをするとさらに観客が減る懸念がある。フェスをいきなり始めるよりも、事前調査という名目で、どういうことをやったら大阪の文化的土壌が豊かになるのかなど、答えを求めるのも一案では。

・４点ほど申し上げたい。まず、今回のフェスティバルを大阪モデルとして注目されるものにするには、新しい大阪らしいものが必要となってくる。従来のモデルや大阪の過去の事例を踏まえた上で、よく検討して欲しい。

・危機感を持っているのは非常に良いのだが、志を高く持つこともとても大事。静岡県の大道芸ワールドカップは、第一回目から世界一を決める「ワールドカップ」が掲げられていた。規模の大小は別にして、そこに行けば評価されるというスキームが組み込まれていることが非常に重要。

・ジャンルミックスだけではなく、新しいジャンルを作るという考え方も必要なのでは。フランスなどでは、色々なジャンルを組み合わせると同時に、我々が理解し得ないジャンルを定める場としてフェスティバルを活用されていることがある。

・プロデューサーがファウンダーなのかどうかというのも重要。何か新しいフェスを始めるという、創始者としての強い思いがないとなかなか難しい。今力を入れている「生きた建築ミュージアム」のモデルとなる「オープンハウスロンドン」は、事務局予算が限られているにも係わらず、ファウンダーの方が、それまであまり一般的ではなかった建築教育を普及させるという強い思いで、何十年も続いている。

・ベンチマークとして高い志を設定し、従来なかったジャンルで世界の人が大阪に行けば評価が上がるという仕組みを最初からプログラミングしておかないと、どこか他所で行われているフェスティバルの縮小生産版にならないかと危惧する。

・フェスティバルはある種色々な人の熱狂を煽るような世界なので、やっている人間に熱狂がない限り何も起こらない。そして物事は、志と情熱と不断の努力が揃わないと動かないものであり、これは基本的に人にくっついてくるもの。そのため、志や情熱があって周りの人を巻き込んでいくタイプの人が真ん中にいないと、前に進まないというのが事実。大阪に係わらず、内外からそういう方に声を上げていただき、フェスティバルの重心を作っていくことが出来れば。

・少し話が変わるが、2016年に「スポーツ・文化ダボス会議」の開催が予定されている。世界各国から色々な方が来られるときに、こういうおもしろいことを大阪がやってるよというような発表の場として活用できれば、情報発信として非常に効果的に、世界に広まりやすいのではと考える。実施時期も検討してみてはどうか。

・フェスティバルについて、現実的な側面のお話と、もっと突き抜けた方がいいというお話があり、どちらも大事でとても難しい。イメージの話になるが、例えばニ　ュース映像などで、トマトを投げるお祭りや、坂道を転がって誰が一番かといったものを見れば、やったりしてみたいと思う。

アート関連のイベントだと、興味がないとなかなかその場に行かないということもあるので、それを打破するため、集客のために本当にしょうもないような、でも絵的にとてもおもしろいものを、パッと5秒ニュースで流したりしてみるのはどうか。テレビは、絵的におもしろいことを追いかけるところもあると思うので。大阪らしさをイメージしやすいお笑いや、地理的にわかりやすい御堂筋や大阪城などと、アートのフェスティバルを一緒にやってみてはどうかと少し思った。

・本当に今日の話は難しい。フェスティバルはただのお祭りではないわけで、中心となるコンセプトが明確になって、それをみんなが支えていく。メインコンセプトをバシッと出せれば。嫌な言い方だが「ダサいと思われている大阪はそんなにダサくない」みたいなのでもいい。またストーリーを作るなら、もうちょっと明確にした方がいい。なぜかというと、大阪の持っている伝統というは本当に掘り出せば掘り出すほどすぐ宝物になってくる。ところがそれを出そうと思ったらもっと革新的なもの・先端的なものを出さないと、出ない構造になっている。フェスティバルを、伝統と革新を両立させ、ぶつけ合える場にしなければいけない。これにはコンセプトが必要で、橋爪会長が先ほどおっしゃった、これまでのフェスティバルを検証する必要があるというところにも関係することだと思う。

・キジムナーフェスをはじめ、越後妻有や瀬戸内芸術祭など、日本各地の有名どころのフェスティバルについては、観客、もしくは評価委員や企画委員として参加してきたが、そのどれをとっても一長一短で「見事です」というのはない。なぜなら、それはイベントやフェスティバルの宿命であり、絶対にみんなから支持されるというのは初めから期待しない方がいい。むしろシャープなコンセプトを持っていて、このコンセプトが達成される、あるいは達成されつつあるということを証明できる、論理構築をしっかりしていくことが重要。

・そもそも、アーツカウンシルがフェスティバルを構想していくのは良いのかという話がある。本来は、評価をしていったりとか、企画提案というところでも、一種の環境作りに対する研究会的なものが自分のイメージ。このフェスティバルを立ち上げて、且つそれ自体を誰が評価し検証していくのかということを考えると、混じる気がしている。

・アーツカウンシルは評価部門から立ち上げていき、企画・調査という3つで揃うというのが本来の考え。今回のフェスティバルについては、まさに企画部門が考えていくもの。フェスティバルが安定していけば、企画から切り離され、評価のみに移っていくが、途中の立ち上がる時期は特に難しいと思う。

・アーツカウンシル部会には、評価、企画、調査の３つの機能があり、既存の府市文化事業の検証・評価を実施した後、改善提案の一つとして新しい事業の提案がされる。そして、企画機能の中で新たな事業やパイロット事業などの企画立案等がされることになる。あとは、部会の審議の状況や見解が文化振興会議に報告・提案され、審議の上、知事・市長に提言されることになる。

・時期的にも、来年度の予算を具体的に検討しないと間に合わなくなる。公募した企画の実施経費や事務局経費等としてはMAX5,000万円のイメージ。ここをシーリングとして、議会や首長にしっかりと説明して予算を獲得すべきでは。橋下市長も文化予算を削ること自体が目的ではなく、役人が前例に基づいて評価をあまりしないままにお金を追加していくことが良くないとの考え。アーツカウンシルが設置され、適切な評価や企画が可能となれば、文化の重要性を理解しているので、それについては予算を増やしていくと再三言っているように感じている。

（２）その他

　○事務局より、上方演芸資料館のあり方や大阪市の文楽事業について報告

→文楽に関しては、アーツカウンシルでも大変気にしているところ。大阪市以外の動きとしては、民間企業から、若い人たちに文楽を体感してもらう事業に使って欲しいと、アーツサポート関西に寄付があった。また、日本財団も、大衆芸能の時代の文楽を蘇らせるプロジェクトを、2020年までという長いスパンで行う予定。様々な場所で、低料金で短時間で楽しめるよう工夫されるとのこと。

→府市も、地元大阪としていかに文楽を大切にしているかということを、国内外に発信して欲しい。技芸員と意見交換する機会があったが、彼らはチャレンジ精神が旺盛。ただ自ら事業を企画運営することは難しいので、府市や民間プロデューサー文楽振興事業を進めてもらえれば。来年度からは、公募型助成でも文楽を対象とするが、あまり応募がないのではというのが、現場からの感触。

・カンヴァス事業、全国知事会の先進政策大賞も受賞しさらにアピールしていかなければならないが、いかんせん展示期間が短すぎる。予算不足で警備が足りないなら、府民のボランティア等活用するのはどうか。

・昨年は中之島GATEで、今年は御堂筋で短い期間で集中的に展開した。経費や、展示場所の調整など難しいところもあるが、期間を延ばせば口コミなど発信力も違ってくるので、来年度フェスティバルが実施できれば、展開エリアを重ねるなど、相乗効果で上手くやっていきたい。（事務局）

（閉会）